

# ふるさと風

第84号 (2013年5月)

風に吹かれて (62)

白井啓治

『山桜見上げて秋を想うて春に吹かれて』

猛スピードでやって来た春が、猛スピードで過ぎて行った。例年のようにのんびりと山桜を眺めながら、さて今年の秋は…と思いに耽る事を拒否されたようで何とも味気ない春であった。しかし、猛スピードで過ぎてしまった桜の春ではあったが茨城を過ぎる辺りから寒さの逆戻りで足を止めてしまった。

ゴールデンウィークに弘前に行くと言っていた友人に、今年はゴールデンウィークには桜はもう終わっているよ、とからかったのだが、とんでもない咲きそうにもないとの予想が出ていた。

さてこの「ふるさと風」も今回で84号となり、創刊7周年となった。早いものである。3・5・7年を無事にクリアすれば後はスムーズに流れを作り出していくと考えていたのであるが、なかなかそう思い通りにはいきそうにもない。決定的な要因は、若い人がいないと言うことだろう。

発起人の一人である、打田兄と懸命に進めて来たのであるが、会員の平均年齢は毎年嬉しい向上である。本当に思うようにはいかない。

しかし、手前味噌ではあるが、会報の中身は着実に充実してきていると思っている。投稿いただける人の輪も友人も確りと広がってきた。逼塞を自覚できない、自助努力の言葉も捨てたかのようなこの地で、少しずつでも前進し、輪が広がってきたのだからこれはもう大いなる成果と言えるだろう。

7周年に関する記事は来月号に全員で書く予定でいるが、此処では「ふるさと風の会」発足のきっかけとなった「ふるさとルネサンス塾」についてちよつと振り返ってみたいと思う。

ふるさとルネサンス塾がスタートしたのは2004年6月であった。2003年秋に石岡の文芸同好誌「ゆずり葉」の行事を通じて打田兄と知り合ったことから、町おこしの活動をしていた人達と会う事になった。町おこし活動のグループと打田兄とは直接関係はなかったのだが、何かの折に石岡にも脚本家がいるよ、との話が出たようで、それで打田兄の紹介でその人達と会う事になった。

その頃は、平成の大合併の進行中で、石岡にも町おこしを活性化させたいという機運は、今よりは盛り上がっていた。しかし、行っているという活動は仲間内での気分的な盛り上がりがあると言

うだけで、具体的な内容は何もなかった。まさか自分が後に手伝う事になるとは思ってもいなかった。町おこしにとって不可欠な物語文化のルネサンスについて話しをしたのであった。これは今でも「ふるさと風の会」やその兄妹である「ことば座」のキャッチフレーズとして用いているものであるが、「ふる里」を定義するとき、その一つの側面として「物語が降る里」がある。

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400  
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

物語というのは人の生きる、暮らすことの「知

恵としての葛藤」と言えるもので、暮らしの知恵と葛藤の無い里、生まれない里には生きるための文化が創造されることがない。暮らしの文化が創造されないとするには、当然のことではあるが人の暮らしの活性はない。

このような側面から、歴史の里石岡を見た時、残すべき物語や伝承すべき物語が死んでしまっている。ふる里を、町を活性化させようと考えるならば、因習や既成を打ち壊し、新しい文化としての物語を創造して行く事である。

と、まあこんな話をしたのであるが、これが活性化運動の中で歩きはじめ、物語の降る里の第一歩として民話ルネサンスのための講座が開設され、小生講師を務めることになったのである。

スタート時は、かなりの鳴り物入りであったのだが、市町村合併の縮小・後退に合わせてルネサンス塾も気づいた時には、一期生の打田兄と兼平妹の二人。そして二期生の伊藤姉、朗読手話舞の小林妹になってしまったのであった。

しかし、小生含めた凸凹の五人で、「解散するのは簡単。しかし止めてしまえばただの無駄骨」とこの会報を始め、兎にも角にも7年が過ぎたという訳である。その間、会員の出入りがあったが、現在は7名の会員と投稿下さる友人達と自由で自在な精神を忘れないで、自分を語り、物語を語って行こうとマイペースな歩みを続けている。

何年まで、何号までと目標はいらないと思っている。自分を語れなくなったら仕方がない。それまでは精々強がりやを大声したいと思っている。

## 規制緩和を望む(2)

菅原茂美

先月号で、何かを起業しようと思えば、既存の法律がガンジガラメで、あまりにも規制が厳しく、ベンチャー企業などすぐ出鼻をくじかれる…と吠えまくった。

スギ花粉で苦しむ多くの国民を見れば、誰でも花粉の少ない、或いは出てもあんなに悪さをしない新品種でもできないのかと当然思う。それをあつる研究所が遺伝子操作で見事に開発したというのがそれを世に出そうとしたら、森林法(昭和26年・法律第249号)に引掛かり、まかりならぬということらしい。万事がこの調子。

なんでこの国は、時代の変化に即応し、フレキシブルな対応ができないのか? 先月号でも書いたが、民法は117年間も改正されていないという。社会情勢は急速に変化しているというのに。誰の職務怠慢か知らないが、現状踏襲にこだわり過ぎる。裏には、既得権にしがみつく権力者の姿が見え隠れ?!

\* \* \*  
国民が選んだ国会議員は、国民の生命財産等を守るための法律を作ることの本職としている。国民の意見を代表して、国政を議論する役目だから「代議士」と言われる。

ところが、その代議士諸侯には、法案作成能力があるのかないのか、殆どは行政府の役人が起草した法案を、どれだけ十分な検討がなされているやら知らないが、大方は、役人の言いなり。『ハイ賛成』で、すぐ成立してしまふ。こうして法律は無限に増えていく。よく吟味したら、縦割り傾向の強い日本では、ある省庁管轄の法律で「是」と

したものが、他の省庁の基準では「否」となる可能性は、十分ありうる。

その増えた法律が、逆に国民の自由活動を制限している。本当に国民を大切に思うなら、国民が身動きできないような法律は生まれるわけがない。一部の既得権者を保護しようとするから、変な法律が次から次と生まれてくる。自由主義・民主主義の国なのだから、国民は公平に扱うのが立法府の責任であろう。

たまには議員立法も見られるが、本来それが当たり前の事で、役所が立案する法案は「従」であるべきだ。代議士は、国民の声を行政に反映させることを本来の任務と認識するなら、貴い一票を投じてくれた国民に代わり、自分の手でしっかり法案を作り、国会に提出して、多数の賛意を得て成立させるべきであろう。筋が通つていけば法案は成立するはず。それが日頃、我が田に水を引くことしか考えぬ、そして国会に提出する法案を作成する能力もないのなら、国会議員になど、頼むから立候補しないでくれ!

国会議員は法律に詳しい、少数精鋭主義で、正義感に燃える人。国家百年の計が、しっかり見通せる人。あくまでも公正で自由と平等をしっかりと守れる人。そんな人になつてもらいたい。粗製乱造は、絶対にあつてはならない。タレント議員など論外だ。鵜の目鷹の目で利権を求め、ウロチョロする有象無象の輩がなるべきものではない。人数は今の3/5分の1ぐらいで丁度良い。公務員の削減や、給料の減額をやる前に、まず自分達の数を減らし、歳費などを減額してから物を言つてほしい。

\* \* \*

私が最近よくよくカチンときたことは、原子力規制委員会の東大教授が、ある断層について、『先の調査で「活断層」の疑いありとした見解は取り消しとする』と発表したことだ。

なんとそれは、電力会社側の科学者により、規制委員会が「地層の動き」とみなし、「活断層」と断定した現場は、以前、その場所が工場だった時代に、コンクリートの柱を打ち込み、それが工事中折れ曲がり、土中で動いたもので、人工的なコンクリート破片を「堆積した地層の動き」とみなしたのは誤りだと抗議を受けた。規制委員会は再確認したところ、まさにその通りで、超初歩的ミスであったという。おまけに原子力規制委員会には、そのメンバーに、地震学者だけではなく、建築工学の専門家も加わる必要がある…などと寝ぼけた発言までしている。

原発の極度の規制は、夏場の電力需要に追い付けない危険性があり、病院など命を預かっている機関にとつて、停電は最悪の事態だ。中小企業の工場など電力供給の制限は死活問題だ。交通機関や物流関係など、計画停電はどれだけダメージが大きいか計り知れない。ドイツも原発を規制し過ぎて、アップアップの状態らしい。世界も日本のきつすぎる規制は、真に困るらしい。

電力が適正価格で十分供給されなければ、大規模工場などさつさと日本から出て行く。その結果は見るも恐ろしいゴーストタウンとなり、雇用の不安定につながり、重大な社会問題となることは見え見えである。そのように電力の安定供給は我が国の繁栄のためには、最重要の課題である。

その電力を安いコストで発電できる原発だが、再稼働できるかどうかの瀬戸際に、コンクリート

の塊を、第一流の科学者が何人も集まって、地層堆積物と見誤るなど、開いた口がふさがらない。それにしても、誤りを素直に認め訂正・謝罪したのはまだ救われる。強情を押し通すならば、全く世間から見放される。

\* \* \*

原子力規制委員会は、既存の原発の安全性について、ズバリ評価できず、更に他の地震学者などに、意見を求め、活断層かどうか判断に苦しんでいるようである。

原発周辺の地層だが、地表から数メートルぐらいを掘り起こし、そこに横たわる地層のズレを、原発側の地震学者は、地下水による「ふくらみ」と言い、規制委員会の学者は、地震による活断層だと言いつける。

活断層の定義にしても、規制委員会は、最初、13万年以内に生じたものを活断層と言っていたが、なぜか途中から40万年以内を言うようになった。(大体にして、現生人類はこれから40万年も生きたられると思っているのだろうか。)

#### 【活断層のランク付け】

**A級活断層** 千年あたり1<sup>1/2</sup>以上10<sup>1/2</sup>未満のずれ (富士川断層など100か所)

**B級活断層** 千年あたり10 cm以上1<sup>1/2</sup>未満のずれ (立川断層など75か所)

**C級活断層** 千年あたり1 cm以上10 cm未満のずれ (鳥取断層など45か所)

以上日本には、活断層は1300か所も

あるというが、原発は、どのクラスの活断層から、どれだけ離れていれば安全なのか。C級やB級なら耐震強化工事で済むのか済まないのか。原子力規制委員会は、7月頃までには、原発ごとに再稼

働可能かどうか裁定を下すというが、夏の電力消費が最大となる前に、早急に結論を出してほしいものである。動かせるものは速く動かし、余計な化石燃料を燃やすべきではない。極端と言われるかもしれないが、少々の放射線増加よりも、地球温暖化の方が、全生物にとつて被害が大きい。

【私に言わせればアフリカで我々現生人類(新人ホモ・サピエンス)を今から20万年前に生み出したホモ・エレクトス原人は、その10年前にネアンデルタール(旧人)を生み出したが彼等は今から3万年前に滅亡している。種の寿命は27万年であった。ということは、兄貴分のネアンデルタール人と我々も同じ種の寿命と考えれば我々の残り時間は7万年ということになる。7万年で滅亡する人類が、40万年先の事にこだわる必要は、どこにあるのであろうか。1万年だって危ないと言ってる学者もいるというのに…。

今日の人類は、折角大脳を膨らましたのに、「寛容性」という重大事項については進化が手遅れであった。その証拠に、未だに世界各地で争いが絶えず、「アラブの春」とか「北朝鮮」とか、そして全人類の2割の人口を占める中国では、国民を統治できず、不満を抱く国民の目を仮想敵国に向けさせ、そこでガス抜きをさせている。いい加減にしてくれ! 日本から援助を受けている時代には、何一つ言わなかったくせに、経済力がついて来たら、たちまち「尖閣諸島」は元々俺のものだと言いつける。】

もつとはつきり言えば、「〇〇に反対する署名簿」などを携え、過激な消費者に陳情された国会議員が、行政庁に圧力をかけ、道理がネジ曲げられる例がしばしば見られる。自己主張を通すための民

主義の暴挙としか言いようがない。代議士たるものは、もっとマクロの目で物を見てほしい。票欲しさの軽拳は許されない。私が地方公務員の現役中、国のある裁定に異議を唱えたら、国の役人は私にこう云った。『そんなこと言うなら、茨城の代議士をまず黙らせろ！』と。国家公務員にも正義感はある。無頓着に裁定を下したわけではない。票欲しさの代議士の「横やり」がいけない。いや、そういう代議士を無慮に選んだ選挙民が、もったいない。

\* \* \*

さて、日本の全ての原発が再稼働停止となったら、わが国の状態はどうなるか？

先ず頭に浮かぶのは、日本の足元を見透かされ、火力発電のLNG（液化天然ガス）が値上がりし、電気料金がグングン跳ね上がる。年金暮らしや低所得者には耐えきれない。長年、国際収支が黒字だったが、既に、大きな赤字に転落している。国力の低下に拍車がかかる。そして、化石燃料を燃やせば、地球温暖化ガスが大量排出され、中緯度地帯まで熱帯化し、熱帯病（マラリアなど）が蔓延し、多数の死亡者が出る。歴史上、海面は100メートルくらい何遍も上下している。6千年前まで竜神山の麓の「波つき岩」まで海水が来ていたというから、現石岡市の多くは水浸しであったろう。放射線量の危険度を示す国際基準というものは、それなりのしっかりした基礎データに基づき設けられているので、幽霊怖さの消費者に、左右される不安定なものであってはならない。国際基準通り、国民に説明を徹底し、風評被害などで地域産業を陥れてはならない。関西の消費者の多くは、放射線検査の結果の表示は見ず、生産地をみて物

を買うという。なんたる事か。

\* \* \*

さて原発と活断層についてそれぞれの立場から専門家が論戦を張る。

原子力規制委員長代理の東大名誉教授・島崎邦彦氏は、地盤がずれて、原発の重要配管が切れたりすることが、最も危険であり大変な事故につながる。地震の「揺れ」は耐震補強で対応できるが、「ずれ」には有効な技術は何もない。それゆえ活断層の直上に原子炉建屋を設置することは認められない」と主張する。

これに対し、産業技術総合研究所理事の佃栄吉氏は、日本には多くの断層はあるが、そのほとんどは活動性ではない。原子力規制委員会は活断層か否かの判断が難しい場合は、活断層とみなしているが、それでは「活断層」のリスクを過剰に見積もることになる。本当に、動く規模の大きい活断層は空撮写真や地質調査ではつきり分かる。それがはつきりしない断層は、たとえ地震があってもリスクは少ない。問題は原発の安全審査は最終的に、①原子炉を止める、②冷やす、③放射能を閉じ込める。の3機能を速やかに実行できるかどうかであって、活断層の有無はあくまで考慮する要素の一部に過ぎない」としている。

そして北大教授の奈良林直氏は、原子炉建屋は相当強固に設計されている。かなり大きな地震でも簡単には壊れない。活断層があるから即「廃炉」は乱暴すぎる。更に過去40万年間に動いた断層まで活断層とするのは非現実的だ。数十年の原発稼働期間と釣り合わない。せいぜい千年単位の議論が適当である。そしてたとえ炉心が溶融しても、フィルターで放射性物質を除去しながらベント

（排気）するシステムを完璧に備えていれば、地域の人々に迷惑をかけることはない。原発は止めているリスクの方がはるかに深刻だ」と言っている。

以上のような議論を見ると、どうも原子力規制委員会という存在は少々暴走気味に見える。安全だと言っていないながら大事件が起こるリスクよりも、危険性が高い」と警鐘を鳴らし、何事も無かったらそれで結構じゃないの」とぐらいの感覚かもしれない。

イタリアの地震学者が『当分安全だ』と宣言したら、間もなく大地震があり、多くの犠牲者が出た。すると学者たちが安全宣言したから国民は危険を避けることができなかつた」という理由で、七年間の実刑判決が下され、現在入獄中という。そんな話があれば日本の地震学者達も、あやふやでもみな活断層と断定し、いわば責任を逃れた方が身のため」と考えられなくもない。

これと同じで、国の法律も、あれもこれも規制しておけば、後で自分が火の粉を浴びる心配がない。国民の生活がどうのこうのより、保身が優先」と読みたくなる。

勿論国民のため、過労死するほどに懸命に働き続ける国の役人を私は知っている。現役中、崇高な姿勢の官僚を多数見てきてはいるが、今回の災害復旧の予算活用に当たり、色々な条件などが付まるとい、地方に便利な活用が制限されるなど、真に法の不自由さを感じさせられる。災害復旧なのだから、もっと臨機応変に：使い勝手の良さが求められていることを認めてほしい。もっと地方を信用し、尊重する態度があつて欲しいとつくづく思われる昨今である。

今年の石岡のおまつりは九月十四日(土)、十五日(日)、十六日(月、敬老の日)の三日間、行われます。昨年は三日間で約四十一万人のお客様をお迎えしました。昭和のレトロな建物を残す静かな中心市街地の三日間はいきいきと活気溢れる街並みに変わります。菊花紋を許された格式高い神輿や絢爛豪華な山車、勇壮な幌獅子など四十数台が街並みを巡行します。その絢爛豪華な山車の上に乗る人形にスポットをあてご紹介しています。四十数台の内、山車は十二台ありますが今回は五台目、青木町の神武天皇さまです。

神武天皇は記紀(古事記と日本書紀とを併せた略称)伝承上の天皇。名は神日本磐余彦(かみやまといわれび)伝承では高天原から降臨した瓊々杵尊の曾孫。日向から発して大和を征服し橿原で初代神武天皇に即位したという。明治以降この年を紀元元年とした。

青木町は柿岡街道に二分され、香丸町(聖徳太子さま)と若松町(八幡太郎さま)に囲まれた、戸数五十余りの比較的小規模な町内です。

青木の名は寛永二年(一六二五)の「常陸国新治郡府中御繩打水帳」に「大き」「おふき」「大うら町」「大木」「青木」「阿ふき」「あをき」の記載あり。明治十一年(一八七八)の「常陸茨城郡府中平城往古記事並諸記録」所収「府中名所」に「六木森木町二四本、木之地二一本、青木二一本」の記載あり。と云うところから府中六木のひとつ「大木」に由来するという。石岡在住二十年余りになります私にとりましてはあまり耳にしない町名でした。

この青木町の神武天皇さまにしましては和菓子工房 おじまさまに尋ねました。店主さんによりますと今、活躍している神武天皇さまは平成三年八月、山車は同町内の大工さんである小井戸様の作製で人形は新しく購入されたそうです。そして平成三年以前の人形につきましては同町内の秋山木工所様がお持ちになっていることがわかり、おじまさんの奥様に秋山様宅までご案内して頂きました。

次の日、秋山様のお仕事の都合で夕方六時半頃にお伺いしました。お疲れのところですので心よく熱心に説明頂きました。

「やっと見つけました……」とお持ちになったのは木製の額(約A3位の大きさ)に貼られた人形三体の写真でした。裏側には

昭和二年九月九日町内年番記念日

秋山徳次郎(五十七歳)

素盞鳴尊 大正十年作

天照大神 昭和元年作

神武天皇 大正元年作

と墨書されてありました。秋山徳次郎様は当主、秋山様の祖父にあたり、驚きましたことに趣味として見様見まねで作られたそうです。本体は頭部、胴体、手、足等組み立てになっており、衣装なども名古屋帯や布を寄せ集めてのお手製で、身につけている、太刀や、弓、装飾品等まで手作りとのことでした。

秋山様、「それでは見せてあげましょう……」と奥の間から木箱に入った神武天皇さま、天照大神さまそれぞれの頭部をお持ちになりました。きりつとした鋭い目、まるで生きているような神武天皇さま、ふっくらとしたお顔ですが凛とした天照大

神さま。趣味の域からほど遠い徳次郎さまの才能と技術、そしてその当時の豊かな素材との出会いにも感心しながら感激ひとしおでした。有難うございました。

この三体内、お気に入りの神武天皇さまに白羽の矢が立ち青木町の年番の時、山車とともに登場することになったそうです。こうしてその後の年番の時に山車と人形、そして幌獅子が交替(現在のように毎回出なかったそうです)で青木町の出し物を盛り上げていく事になりました。

新しく購入された平成三年からは、華やかさを誇った徳次郎さまの神武天皇さまは、当主の秋山様に大切に大切に保管されています。他の二体、素盞鳴尊さま、天照大神さまは衣装等失われてしまっているそうです。

大正そして昭和の初期に作られた貴重な人形さま達が常時展示され皆さんの目に触れる事が出来ればどんなにか心豊かになることでしょう。石岡にはこのような文化財を展示する空間がないことがとても残念です。

今、茨城県は盛りあがっています。常陸国風土記編纂の詔が出て今年で一三〇〇年。七一三年、元明天皇の詔で、その土地の伝承、名前の由来、産物、その土地の風土、歴史が記載された貴重な資料報告書で、その当時常陸国の国司であった藤原宇合、歌人の高橋虫麻呂等によって国府がおかれたここ石岡の地で編纂されたといわれています。

(参考資料 石岡の地名)

・桜吹雪 子ら踊り出す

ちえい

私は情報の中で押し潰されそう。量の多さ、質の豊富さ、其処に速度が加わって大して理解も出来ない中に毎日出版物の波が押し寄せてくる。身近な回覧板の利用の事でも問題が起きている。

四軒しかない私の地域でさえなかなか回っていない。十軒以上という所では随分時間が掛って、行事が終わってしまったとかメ切が済んで間にあわなかった事があるという声も聞く。種類が多いと面倒さも加わって自分には関係ないと塵として扱い、塵の多さを嘆いている。

字が小さく見辛いから見たくない。屋敷に二軒あると親夫婦は知らなかった。若夫婦は関係ないという。家庭内でコミュニケーションをとれない事が地域に影響を及ぼす事もあるようだ。こういう状況では何の為のお知らせか分からない。何かよい方法はないものだろうか。

まず自分の範囲での問題解決の一方法として、昨年の秋から冬にかけて実行した私宅を回覧板の出た日の時刻と戻ってきた日の時刻を印してみる事にした。

- ・9月14日(金)夕方(五通) ～ 27日(木)夕方：13日間
- ・9月24日(月)朝(五通) ～ 10月12日(金)夕方：18日間
- ・9月28日(金)昼(四通) ～ 10月12日(金)夕方：14日間
- ・10月28日(日)夕方(六通) ～ 11月15日(木)午後：18日間
- ・11月16日(金)昼(四通) ～ 12月4日(火)夕方：18日間

- ・12月1日(金)夜(六通) ～ 12月17日(月)夕方：16日間
- ・12月24日(月)夕方(五通) ～ 1月20日(日)夕方：27日間

新しい年をむかえるにあたって心新たにしようと思い、手紙を添えて回してみた。「十日位の間に一回りするようお願いします」と。

- ・1月17日(木)朝(三通) ～ 1月20日(日)夕方：3日間
- ・1月24日(木)昼(三通) ～ 2月13日(水)夕方：20日間
- ・2月15日(金)朝(三通) ～ 2月28日(木)夕方：13日間
- ・3月1日(金)朝(七通) ～ 3月5日(火)夕方：4日間
- ・3月18日(月)朝(三通) ～ 3月27日(水)夕方：9日間
- ・3月24日(日)夕方(一通) ～ 3月27日(水)夕方：3日間

二十五年の新年度に入って逆に回すことになってみた。

- ・4月5日(金)夕方(三通) ～ 4月9日(火)昼：4日間
- ・4月15日(月)朝(四通) ～ 4月22日(月)夕方：7日間

四軒を回る回覧板。距離にして百メートルもない範囲でも日数が掛る。多い所は当然掛る事になる。新宅した家が元の地区に入っている事で距離も時間も掛る。自然に不満が出てくる。大分以前の事だったが、回覧板が何処迄回ったか、何処で不明になったかで大騒ぎになった地区があった。賢明な地区では新宅した同志で一つの纏まりを作

った地区もある。纏まらずに流れた地区もある。多い情報を粗雑に目を通す事で勘違いもあるようだ。家庭の状況で様々だ。私達の所は戸数の少ないのを幸いとし中味を確り見てもらおうと思ひ、合った時は挨拶以外に回覧板の中味を話し掛け合うようにしてみた。

各部所から集まった広報は、各地区の区長宅に運ばれる広報物も山の様で車さまさまのようだ。区長宅は一時的に家内工場化し家中で各常会毎に区分けする。回覧用の広報と各戸数用に配布する物を分けて纏めるようだ。月に二～三回の作業となり、地区の常会長に配って歩く。それから私がバトンタッチしていく事になる。常会に入っていない人は公的場所やコンビニエンスストアに置いてあるから各々で取りに行く訳だ。

市には無線の広報がある。各家庭にもテレビ、パソコン、他いろいろとある。個人では携帯電話を持つ、それぞれ果たす機能は違うけれど情報の渦の中で影響を受け合い、多かれ少なかれ被害も受けている。こんなに必要なのかと思う事も度々ある。

使用する紙はふんだんにあって不自由しない。色彩も華やかに、写真も多く簡単にコピーも出来る。豊富な紙の原料は外国の森林を開いて伐採した物だ。環境を変えて新たな問題を起こしている事を使う人達は、一枚の紙から知る事が出来るだろうか。

昭和の合併の前後ガリ版印刷だった。インクがあちこちに付き苦労があった。手折りして封に入れた手紙は小遣いさんと呼ばれていた人が配っていた。道はガタガタ、雨上がりは泥水が跳ねる。自転車はパンクをしたり、配達も時間が掛ったそ

うだ。時間によって行った先の主人に「まあまあ、一杯」と誘われて配達も遅れたり、翌日勤めに行く前に配って何とか間に合わせたとか聞く。玉里の時代常会に入っていない人に広報を送っていた。これが合併後の不満の一つになった。考えてみると恵まれていた事が当たり前となり、新しい居住した人達への繋がりをもつ働きかけが欠けていた事も指摘された。

初めて回覧板そのものや言葉を知ったのは戦争中から戦後にかけてだった。「とんとんとんからりと隣り組、回してください回覧板、教えられたり教えたり」ラジオから聞こえてくる歌だった。回覧板を隣りへ持って行くのは子供の仕事だった。隣といっても山道をしばらく行くのだった。昔の役場は三人しかいなかったと話してくれた人がいた。村長と収入役とお茶くみ、手紙配りの小遣いさんだったという。昔と言っても昭和の初期か、大正期か、それとも明治期か今思うと確り聞いておけばよかったと思う。

今日は「玉里御留川」のあのページを開いてみた。七十八ページあたりからだ。「玉里御留川」で運上請負をする出資者と命懸けで働く漁民、監視する側の川守、その上奉行所(藩)の熾烈なものだったろうと思える。漁場としては御留川内六ツの村に二十四ヶ所ある。御川筋内七ツの村十六ヶ所ある。その中での規則を徹底させる為に知らせを出す。違反者が後を引かない。何時の世も人のなす業か、討えが出る。又定法が出る。…を繰り返して来た。

「玉里御留川」運上請負年季切替は三年毎になる。入札の希望者を募る為に入札触廻状を出す事になる。御留川(玉里・箕和田)が創られる以前

には霞ヶ浦は四十八津とよばれる湖岸の村々の入会であった。その反対を押し造った制度であったから四十八津の存在を疎かに出来なかっただろうと思う。郡奉行所から川守へ、川守から奉行所への返事等いくもある。又「相背村」「相守べき」などの文章が多く出てくる。四十八津には北の津頭(玉造村の庄屋)南の津(古渡村の名主)がいた。二つの津頭に管理される「くみ」に分けられていた。北の津頭の下に、北組下(四ヶ村)、北組下(五ヶ村)北グミ(二ヶ村)、そして南の津頭の下に、南組下(四ヶ村)西代(一ヶ村)南組下(四ヶ村)南グミ(三ヶ村)と一村づつ庄屋の名がつづいている。川守が写しをとる時の都合、利便のため村々を分けたという。

入札触廻状(寛延三年のもの)は四月四日郡奉行所から領内(潮来、実倉、川守宅)へ届けられる。川守鈴木源太左衛門の所二通届く、川守は浮島村へ四月五日一通届ける。もう一通は古渡村へ届ける。入札日限は二十日とする。入札が集まったら源太左衛門は早々に役所へ差し出すようにとある。九十四ページから九十九ページ迄の享和元年のものが今回特に興味をそそったのだった。奉行所から三月四日に届いた入札触廻状を五日には浮島村と古渡村に届けている。寛延の時の触廻状と同じように浮島村で受け取った触廻状は霞ヶ浦を東に廻って行く。六日は神崎、七日は八筋川、八日は加藤須、九日には源太左衛門宅に届いた。東廻りで行った触廻状には読んだ村毎に日付、時刻、押印をして次へ廻すように指示されといる。とのことだった。例えば、

三月五日午之刻披見仕候 浮島印  
三月五日申ノ刻披見仕候 馬渡印

三月五日酉刻拝見仕候 下須田印  
古渡村から西に廻った物は押印だけだった。絶対服従の階級制度の時代からとは思うがこの広範囲の地域、水辺の天候、生産生活はさておいてひた走りに届けたのだろう。

それらを綴った和紙は作り上るにも時間がかかり、高価な物であったし、求めるにも産地に向く訳で今の様な訳にはいかなかった筈だ。それだけに当時の人は大切に再利用をし、その時々々の生活に役立ててきたのだ。私の知っているのは、父がこよりを作っていた。障子の破れをはり合せたり襖貼りに使っていた。農家の人が果物に袋を被せていた。やがて便所に置かれていた。茶の葉を炭火で煎る底に貼っていた。水にも強いが火にも強いと思ってみていたことがある。あの頃古文類は随分失っただろう。

ところが大場家などは襖の下貼りにしてあった文書から広範囲の地域、長い時の流れを物語る文書が大量に見つかり郷土の歴史を知る一枚一枚として大切にされている。

現代の私達は、大量の品物と沢山の情報と時計の何倍ものスピードで過ぎていく時間の中で(大切なものを探し求めることが出来るのだろうか。四月二十八日(日)昼 八通は十七人に何を残して、何時戻ってくるのだろうか。

先々月号でシルクロードと金色姫のことを書いた。そして常陸国にある養蚕神社を訪ね歩いた。この常陸国三蚕神社にそれぞれ伝わる金色姫は

5世紀半ばにインドから流れ着いたとされる。

さて、今回のお話は、同じ姫だが印旛沼近くにある「松虫寺」に伝わる松虫姫の話である。内容は、

「奈良時代に聖武天皇の第三皇女・松虫姫（不破内親王）が重病にかかり、みやこにいたたくさんの名医にかかっても容態はよくならなかった。

ある晩、姫の夢枕に薬師如来が現れ、「我は板東下総の国の薬師である。下総の国に來られるがよい」とのお告げがあり、藁をもすがるおもいで、大勢のお供をつれて姫は遠い東の地をめざして牛車に乗り旅立った。そして、長い旅の途中に、供の者は次第に減り、やつと板東の地にたどり着いた時は乳母の杉自と、権の太夫や数人の武者だけしか残っていなかった。印旛沼のほとりまでくると、そこに薬師如来がまつられており、姫は一目見ると夢に見たものと同じだと確信し、その里に庵を結び、来る日も来る日も薬師如来に願かけをした。村の人々は、彼女の心細さを案じ、身の回りの世話などをした。姫はそんな村人たちにとっても感謝し、お札に文字の読み書きや、養蚕などを教えた。そして必死に祈る姫の思いが届き、病はすっかり治ったのであった。それを知った天皇は喜び、行基に命じて、この地に薬師堂を建立した。すつかり元気になった姫がみやこに帰ることにになると、村人たちは病の快癒を喜び、別れを惜しんでくれた。乳母の杉自はこの地で暮らしを望み残

ることになった。また往路に使われた牛ももう戻る力がないので村に残った。その後乳母はこの地で読み書き、養蚕などを広めた。しかし、残った牛は悲しんで、薬師堂の近くの池に自ら身を沈めてしまった。不破親王（松虫姫）は都に戻って過したが、死ぬ時に、自分の骨はこの松虫寺に分骨されることを望んだ。これが現在の松虫寺にある「松虫姫御廟」と呼ばれる堂のことだと言われている」

さて、この伝説を読んで皆さんはどのように思われるのでしょうか。多くの方は、こんなこと嘘に決まっているとお思いになるのではないのでしょうか。

しかし、なぜかこの話の登場人物は実在の人物であり、世の中に知られた英雄や架空の人物ではないのです。なぜこの地にこのような話が伝わっているのでしょうか。とても不思議です。

この話の主人公である松虫姫は不破内親王の幼少の名前で、父は聖武天皇で、母は県犬養広刀自（あがたのいぬかいのひろとじ）です。天智天皇にはもう一人有名な夫人「光明皇后」（光明子）がいます。国分寺・国分尼寺の総本山である東大寺と法華寺を建立して、万民の平安を祈願したのです。

この松虫姫の病は癩病（ハンセン病）であったといわれています。当時のこの病はどのように見られていたのでしょうか。日本でも長い間、らい予防法で隔離政策が取られてきて、これが廃止されたのは平成8年になってからです。この間に隔離・結婚しても子供が産めないなど多くの悲劇を生んだとしての記憶も比較的新しいものです。

昔、見た映画「ベンハー」での母と妹がらい病で自ら洞窟に身を潜めていたのをベンハーが探し、

キリストの処刑で流された血で病が治るというシーンもとても強烈であった。キリストのいたローマ時代にもこの病が忌み嫌われ、のけものにされ続けてきたのでしょうか。

この松虫姫の父である聖武天皇の妃である光明皇后の話としてよく知られた逸話があります。

皇后は奈良法華寺で自らすすんで千人の俗人の垢を清めようとしました。そして最後の千人目に重い癩患者があらわれます。体は汚れていて、背中には膿をかかえて苦しんでいました。皇后は、この患者の体を洗い、患者の求めに応じて、この膿をみずから吸ったところ、その患者は阿闍如来（あしゅくにょらい）であったことを告げて消え去ったという話です。

その他には、茨城でも伝説となっている小栗判官と照手姫の伝説です。毒酒を飲まされ死の世界に行った判官は、癩患者の身となってこの世に戻されます。そして熊野の温泉（靈湯）に浴して病が完治し生き返るといいます。いまでも熊野にはこの温泉が残されています。その他にも河内国（大阪）の説話「しんとく丸と乙姫」でも熊野の湯で治る話や愛媛県八幡浜市の白石には、京都の公家のお姫様が癩病にかかり船で流されてこの浜に到着したという話が伝わっています。虐げられた人びとが信仰と一体となってそのような話を作り上げていったのでしょうか。

私が、この話を採り上げたのは、茨城県河内町の千葉県との県境になっている利根川沿いに「十三間戸（じゅうさんまど）」という地名を見つけたのが始まりです。日本語の「窓」はこの「間戸」という言葉から来ているそうです。日本住宅の仕切りの戸は、屋内から見る日本庭園をより美しく見せ



る効果を持っています。しかし、十三間戸という字を見て、奈良北山十八間戸（げんと）を思い浮かべたのです。

この施設は奈良時代の1243年に、重症の癩患者を収容する施設として、西大寺の忍性によって般若寺の近くに建てられ、戦火で焼けて江戸時代になってから少し南の北山の地に移されたものです。長屋のような建物を、一人一間というように区切り患者を収容したものだそうです。

私はこの松虫伝説を読んでなにか少しホットするような気持ちもするのです。癩病と言われる病に苦しむ人たちに、光明皇后などの話も都からはるか離れたこの荒涼とした印旛の地にこのように形を変えて伝わり生まれてきた伝説なのかもしれません。

ここでも癩病とは言わずに「ハンセン病」という言葉を使うべきかもしれません。長い間悩んでこられた患者の方やご家族の思いを知らずに書いていることに快く思わない方もおられるかもしれません。

私が中学生の頃、父が結核で清瀬の結核研究所に1年程入院していました。清瀬からそれほど遠くはない東京郊外に住んでいた私も、毎週洗濯物などを届けに自転車で病院を訪れました。ルートは久米川駅横を通り、多磨全生園の施設に沿って通り抜け、清瀬に出るというルートでした。緑で覆われたこの多磨全生園がハンセン病患者の暮らす施設だと知ったのはそれより少しあとのことでした。施設は暗い雰囲気はなく、普通に出入りもしていたと思います。「らい予防法」は廃止となりましたが、今でも多くの方が過ごしておられるようです。

松虫伝説の伝わる松虫寺は印旛沼の麓にあるひっそりとした寺です。北総線の印旛日本医大駅が最寄駅ですが、この駅には「松虫姫」という副駅名もあります。

石岡に国の特別史跡として「常陸国分尼寺跡」があります。この入口に「法華滅罪之寺」と書かれた石柱が置かれています。もう寺がなくなつてどれくらい経つのかもわからない状態ですが、何か救われない人々の罪や性を和らげてくれる存在だったのでしょうか。「法華滅罪之寺」は奈良の法華寺の正式名称です。この本尊である「十一面観音」は高さ1メートル程の木造ですが、とても好きな仏像の一つです。慈悲に溢れたこの像のモデルは光明皇后だと言われています。実際の光明皇后がこのような人物だったかどうかはわかりません。でもそのように伝わることで万民の安泰を図つたのでしょうか。

今の政治は本当の弱者に優しいのだろうか、声の大きい方にばかり目が向いているのではないだろうか。憲法改正のハードルを下げる議論が本当に私たちのことを考えてのことなのだろうか。議員定数も減らしもせずに、こんなテーマを参議院選の公約にそつと潜らせるなどというまやかしが通るとしたら、今も胸の中でモヤモヤした気分の悪い思いがするのはなぜなのでしょう。

最後は国民投票があるからいいではないかというが、これもいつの間にか投票総数の過半数となつてしまったのでしょうか。私が中学で習った憲法では国民の半数となつていたのだから、国民の半分という当たり前の解釈があつたように思う。それを投票総数の半分で変えられると国会議員だけの判断だけで成立してしまうのも違和感が拭えない。

い。自分たちは国民よりえらいという傲慢さがたまらない。やはりしっかりと自分の意見を言えるようにならなければいけないのだとの思いを強くしています。

## ギター文化館 2013 CONCERT SERIES

- 5月19日 大島直ギターリサイタル
- 5月25日 マリオ鈴木ギターリサイタル
- 6月9日 國松龍次ギターリサイタル
- 6月23日 高橋竹童津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35  
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

## 《ふうの》

アレンジ書写・書写会席料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(大)「つひら」ちゃん

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-46-60000

## 【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

### 第五章 怪しげな対決（2）

その頃、即位されたばかりの宇多天皇は太政大臣・藤原基経らの苛めに遭っていた。天皇が下した文書の文言にイチャモンを付けられ、それを書いた側近の橘広相（たちばなひろみ）と共に天皇が苦境に立たされていた。「阿衡（あこう＝位）の論議」というのだが肝心の藤原基経までが不貞腐れて出勤しなくなった。どうでも良いことで空転したがる現代の国会は、その伝統を立派に受け継いでいるようだが国民は困る。菅原道真是学者として公平な立場から意見書を書き、藤原基経に送って反省を促した。このことを知った宇多天皇が大いに感激され菅原道真を登用されたのである。

参議に兼ねて左大辨（四位の職）からスタートした菅原道真是中納言から権大納言兼右近衛大将となつて藤原時平の地位に並んだ。さらに皇位が醍醐天皇に譲られた際にはライバルの二人が一緒に大臣になり、それに対して宇多上皇が天皇に或る助言をされた。それは「藤原時平と菅原道真の二人が大臣の職に在ると、いつかは主張が対立し争う恐れが出るので、暫くは大臣が一人のほうが宜しい」という意見であり、其の際には「時平は未だ若く、心掛けや才覚が完成していないので道真一人を大臣とされるよう……」進言をされた。醍醐天皇も父帝の意見に同意され、菅原道真を呼び入れて其のように達せられた。道真是固く辞したけれども断り切れず、藤原時平の大臣職が解かれることになったのである。

この事は上皇と天皇と道真しか知らないのだが三人だけで一室に居たことを怪しんだ時平が何かを感じ取って三者会談の内容を知ってしまった。藤原時平はこれを恨み菅原道真を失脚させるネタを探していた。しかし高潔な菅原道真にはゴシップが無かった。それ以前のこと、宇多天皇は第一皇子である敦仁（あつひと）親王（醍醐天皇）に皇位を譲ろうとして、道真に意見を聞いたことがある。当時の宇多天皇は即位以来、十年ほどしか経っておらず、年齢も三十になつたばかりなので、「主上は未だ壮健であられるから、今のご退位は早すぎます」と道真是諫めた。

結局、宇多天皇は敦仁親王に「寛平の御遺戒（かみびょうのごゆいかい）」という天皇心得を与えて譲位されたのであるが、醍醐天皇の即位後、数年経って菅原道真が宇多天皇に意見を述べたことを藤原時平が知ってしまった。取り巻き連中やら菅原道真を妬んでいる公家を集め、追い落としの作戦を考えて醍醐天皇に讒言したのである。醍醐天皇も「自分の即位を止められた」ことであるから良い感情は持てない。時平らの「嘘」を百％信用して道真左遷命令を承認した。その嘘というのは幼児が発表会で演じる劇の筋書き程度の簡単なものであつたけれども結果は重大である。

醍醐天皇には齋世（ときよ）親王という皇弟が居り菅原道真是娘を齋世親王の許に入れていた。藤原時平らは「菅原道真が敦仁親王に譲位されるという宇多天皇の御考えに反対したのは、自分の娘婿に当る齋世親王を皇位に就けようとする野心からであつた」とする筋書きを作つた。言いがかりとしか考えられないが、これを聞いた醍醐天皇は自分のことでもあるし、若気の至りで頭から

何の根拠も無い嘘を信じてしまったのである。

醍醐天皇の子である朱雀天皇（院）は、菅原道真の「復讐リスト」に名前が載っていたから祟りを受ける心配があつたけれども、朱雀院の弟である村上天皇から皇位を継いだ冷泉天皇（院）は時効により対象者ではなかつた。ところが、この天皇は幼稚園時代から「物の怪（もののけ）」に取りつかれている」と言われていたそうで、気の毒ではあるがこれは本人の責任ではない。目に見えない相手があつて、その祟りの所為で「異常だ」と言われたらしい。その相手というのが本来は藤原氏筆頭家系である南家の藤原元方という人物であり藤原時平とも菅原道真とも面識は無く、他人以上に関係が遠い。なぜ、その男が冷泉院に取り付くことになつたのか……

元方には自慢の娘があり、藤原一族の慣例に従い村上天皇の許に差し出していた。天皇との間に第一皇子（広平親王）が誕生して、天皇の寵愛も深く、皇太子に立てられることを期待していた。ところが、その頃は南家よりも北家藤原の力が強くなり、道長の祖父に当る師輔（もろすけ）が差し出した安子の生んだ第二皇子が皇太子になり、安子も皇后になつた。これは天皇の意思ではなく藤原一族内諸派の力関係で決められた後宮人事であるから理念も法則も思慮もない。

第一皇子でも皇太子になれなければ番号の意味が無く、回転寿司の順番待ち以下になつてしまうから将来も無い。庇護者の藤原元方も権力が得られないから失望して早死にするしかない。ご丁寧にも第一皇子と母親（元方の娘）と元方の三人が次々とあの世に行つてしまった。警察で事件性は無いと判断したため新聞の死亡欄に載つて世間が

気の毒に思っただけである。しかし三人は悔しい思いをして死んだので、事情を知った閻魔大王が「怨霊」と認定して此の世に里帰りすることを許してくれた。元方は此の方法で皇太子になった第二皇子に取り憑(つ)いた。それが冷泉院である。

冷泉天皇は幼稚園時代から「精神の安定を欠く」と言われたようで、他人に言われれば本人も不可解な行動を取らなければならず、偏執狂のような行動が目立つたらしい。十七歳で即位して特に悪さもしなかったのだが、藤原一族により二年で同母の弟(円融天皇)に譲位させられた。しかし冷泉院は退位後も四十年以上を生きながら、この勝負は藤原元方怨霊の負けのように思える。

ところが、この天皇の短か過ぎる在位期間の最後に結果として、それが退位を早めたような事件が起こる。この事件は明らかに藤原氏の陰謀であるから、冷泉天皇にも藤原元方の怨霊にも責任は無い。実は、清和源氏が桓武平氏に先立ち武士として中央政界の汚れ役を引き受けるようになり、白旗が目立つ様になるのは此の事件からであり、白旗も最初は汚れていたようである。一方、桓武平氏は、それよりも二十数年前に関東平野に赤旗を靡かせていたけれども、それは一族の内乱に端を発した「平将門の乱」であつたから、敵味方の区別もできないし赤旗の色も冴えない。

村上天皇の第一皇子である広平親王は藤原元方に伴われて早くから怨霊になつてしまつた。第二皇子は冷泉天皇であり、第三皇子は早く亡くなつたか母親の身分の関係か皇位の話に出て来ない。第四皇子は為平親王と言ひ、優れた人物であつたらしく村上天皇も皇位継承者に考えていたようである。この皇子は右大臣・源高明(朱雀天皇の異

母兄・醍醐源氏)の娘を妃にしていた。第五皇子が円融天皇となる守平親王である。

冷泉天皇が藤原元方らの怨霊に気に入られ偏執狂にされてしまつたことは、次期天皇の可能性があつた為平親王の運命をも狂わせた。村上天皇の意図も為平親王にあつたようで、順当に行けば冷泉天皇の皇太子として指名される約束が藤原一族によつて破られ、守平親王に変えられてしまつたのである。理由は極く簡単で、もし為平親王が即位すれば源高明が天皇の義父として力を得る―藤原氏の力が弱まる懼(おそ)れがあるから…この場合、冷泉天皇がしっかりといていれば、天下国家の為に自分の皇太子として人格者である為平親王を選んだのであろうが、冷泉天皇は怨霊の所為で朝からカラオケに熱中したり、高校野球部員のようになつて追つたりしていらつたらしい。

為平親王の庇護者である源高明の失望も大きかつたが、高明にとつての重なる不運は、藤原一族の中でも協力的であつた藤原師輔に死なれたことである。その為に、同じ藤原でも了見の狭い連中に狙われたのである。冷泉天皇の最後の治世…と言つても全部で二年しか無いから、治世二年目の安和二年(九六九)三月二十五日に左馬助という旧運輸省の部長級の役人である源満仲と、武蔵国の次官を務めて帰つて来た藤原善時という人物が重大事件を役所に密告して来た。この「密告」という制度は、現代でも独裁者のいる国では重要な統治手段であるらしいが、根拠が無くても「嘘」の程度が上質であれば採用される利点がある。

密告の内容は「守平親王が皇太子となつたことに失望した源高明が、不平分子を集めて冷泉天皇を襲ひ、皇位を奪つて為平親王の即位を目指す行

動を起こそうとしている…」と言ふもので、二人の密告者も、誘われて仲間に加わつたけれども、改心してご報告に参上した…という尤もらしく御丁寧な注釈が付いたものである。専門屋に頼んで書かれた密告文は碌な審査も行われず大臣に送られたから、文面に名前があつた中級公務員やら軍人などが検非違使に逮捕されてしまつた。その中には平貞盛と共に平将門を討つた藤原秀郷の息子(前相模介)藤原千春も入つていた。それからすると、五十数年も以前に起きた「天慶の乱」における平将門の怨念が未だ残つていたことになるのだが、平貞盛は既に死亡していたのであろう。貞盛との関係は分からないが平貞節(さだとき)という人物が犯人組に入れられている。

此の事件は「安和(あんな)の変」と言い明きらかに源高明(為平親王派)を排除するために、藤原氏により脚本をプロに外注して作られた立派な物語(現代的に言えば冤罪事件)であることが見え見えだつたにも関わらず「菅原道真の報復」ほどには知られていない。通俗史の「前太平記」には犯人とされた人々に対する悪意と偏見に満ちた記事が長々と書いてあるが、この本は「源氏の御用記事」であるから、密告者・源満仲が怪しげな活躍をする内容を正当化した「嘘」に過ぎない。その源満仲こそが、やがて平氏と競う清和源氏の祖で桓武平氏だと平国香に相当する位置に居る。

多分、普段から源高明や為平親王の許に出入りしていた官僚や武士などが選抜?されて謀反人にされたのである。容疑者には拷問も行われたようであり、火の気が無い所から煙が立つて事件が成立した。その為に逮捕に向かう連中が大暴れした割には謀反人とされた人たちが「どういふ反逆

行動をしたのか」良く分らない。これは「嘘」で始まる事件の特徴である。源満仲が藤原千春と喧嘩したためにグループから抜けて密告した二人の勢力争いが発端とする説もあるのだが、この事件により大儲けをしたのが藤原北家であるから、黒幕はこいつらに違いないのである。

安和の変にどれだけの影響を受けたかは分らないが、その年の夏に冷泉天皇は退位され（藤原氏によって辞めさせられ）十一歳の守平親王が藤原氏の思惑どおり第六十四代の円融天皇として即位した。この天皇の皇太子時代には藤原北家の師尹（もろまさ）という人物が補佐していた。天皇の叔父であるから、これから権力を振るおうと思っていたところ急死してしまったので、これは安和の変の余波で源高明の怨霊にヤラレタ！と報道されたらしい。師尹だけでなく、兄の実頼や甥の伊尹（これまさ）らも連続死したので、源高明も怨霊として活躍したことは間違いない。ところが怨霊も見通しを誤るもので、藤原北家の中でシブトク生き残ったのが藤原道長に繋がる系統であり此の一派が「我が世の春」を謳歌することになる。円融天皇は十五年ほどで退位された。

第六十五代の花山（かざん）天皇は冷泉天皇の第一皇子であり、母親は藤原元方を蹴落とした師輔の子の伊尹の娘である。文帝と同じく異常な行動があったと言われているが、怨霊も近づき易かったのであるうか。十七歳で即位して、こちらも父親を見習って二年で辞めた―正しくは「藤原一族に騙され退位させられた」のである。儀式の最中に「重い！」と言って冠を脱ぎ棄てたとか、宮殿内で馬を乗り回したとか言われているけれども我が侷な若者なら有りそうなことで、異常な行動

と言うほどのことでも無いし、其処まで責任を負わされると怨霊も辛い。

これから述べる花山法皇がらみの事件は、別稿の「才媛の時代」でも触れているが、詳しく説明すると、先ず現代の「振り込め詐欺」の元祖のようなことを藤原一族が仕出かしているのが藤原一族も権力を握るためには何でもしたらしい。藤原道長の父親である兼家や、道長の兄の道兼らは「剃り込み詐欺」という手段で花山天皇から皇位を奪ったのである。現職の天皇を騙し、強引に頭を丸刈りにし丁寧に剃り込んで丸坊主にしてしまったから仏門に帰依した法皇のような姿になって、現職の天皇では居られなくなってしまう。髪の毛は自然に生えてくるけれども「皇位は一日たりとも空白に出来ない」などと勝手なことを言われ、涙を吞んで退位したのである。

その頃も藤原氏は天皇の後宮に競って娘を送り込んでいたのだが、その中で兼家の異母弟になる為光と言う人物の娘だけがなぜか天皇の寵を得て懐妊した。これでは困る同族が大勢居たのだが、花山天皇は為光の娘だけに執着した。しかし怨霊の所為かどうかは分からないが妊娠の経過が良くなくてこの女性の出産前に死んでしまった。天皇は嘆き悲しみ、冗談とも本心ともつかず、思わず「出家したい」と言ったのである。是を知った藤原兼家と息子たちは花山天皇の許に押し掛け、殊勝な顔で強引にお寺参りを勧めた。何もする気が起きなかつた天皇であるが、無理に勧められたから、仕方なくお経の一つも上げるつもりで一緒にお寺へ出掛けた。

本堂に上がると、あらかじめ兼家に命じられていた坊さんたちが、手に手に剃刀を持って現れ天

皇を取り囲んで強引に坊主頭にしてしまったからその瞬間に花山天皇は消滅して花山法皇となり、毛が生えるまでは何も出来なくなってしまう。当時は未だ育毛剤が市販されておらず、警察に届けても「ケガ無くても良かったですね！」と言われるのが落ちであるから諦めるしかない。

藤原兼家は呆然として頭を撫でている花山前天皇を尻目に、あらかじめ皇太子としておいた七歳の懐仁（やすひと）親王を即位させた。自分の娘・詮子が生んだ円融天皇の第一皇子であり、一条天皇として後宮に紫式部（源氏物語）、清少納言（枕草子）、赤染衛門（歌人）、和泉式部（歌人）らが絢爛たる女流文学の花を開かせる「才媛の時代」を出現させることになる。文化的には良かったかも知れないが、この時代は未だ「怨霊」が絶滅した訳ではない。紫式部もそれを承知しているから怨霊のご機嫌取りのつもりで影響を受けた二人の天皇を物語に登場させたのであろうか：

一條天皇が即位したのは七歳であるから、政務は藤原一族によって処理された。大活躍の後「これからは静かに暮らそう」と思っていた怨霊の皆さんは、藤原氏の態度が一向に改まらないのを知って再登場することにした。その頃、都で暴れていたのは袴垂保輔（はかまだれやすすけ）と言う盗賊であり、日本盗賊史（そういう本が有るかどうかは知らないが）では石川五右衛門と共に盗賊の代表になっている。袴垂が、引退を考えていた怨霊・藤原元方の子孫とする説もあるから怨霊の再登場は有り得る。この盗賊は何かを盗んだとかいうことでは無く、役人などに傷を負わせたりする権力への報復行為を繰り返していた。

政府要人の病死も続いたことから摂政関白の藤

原道隆らは被害の拡大を憂慮した。正暦四年（九三三）に太宰府に勅使が派遣され、菅原道真公を正一位左大臣に任官し、さらに数か月後には太政大臣の位を贈った。そういうお為ごかしに天神様が怒った所為だと思いが、今度は宮殿が何度も放火され、高野山が落雷で焼け、西の方から疫病が伝染して来て藤原道隆ら多くの政府要人が死亡してしまった。道隆は道長の兄であり、その後を継いだ藤原伊周（これちか）が政界に登場するのだが、この人物が弟の隆家と共に考えられないような事件を起こして失脚する。これも怨霊の所為であろうか：そして甥の没落を踏み台にして台頭してくるのが「此の世をば我が世とぞ思う」と勝手なことを言った傍流の藤原道長であり、姉である詮子（一条天皇生母）の後押しもあって権力を握り、結果としては紫式部らの才媛が活躍し源氏物語が世に出ることにはなる。

ついでに触れておくと、問題を起こした藤原隆家の子孫が、平清盛の継母で源頼朝少年の死刑を無期懲役に減刑させ、結果的に源氏再興―平家没落―鎌倉幕府創設―武家政治というように日本の歴史を大きく変えることになった池禅尼である。そして「平治の乱」を起こした藤原信頼もこの家系の人物だと思われるが、こちらの方は源氏の没落、平家の興隆の切っ掛けとなった事件の首謀者とされ平清盛に首を斬られた。藤原道隆―隆家の系統は怨霊並みに活躍？している。

菅原道真を陥れたのは藤原時平であるが、その弟の忠平から師輔―兼家―と続くのが花山法皇を騙し、そしてこれから述べる事件を起こした道隆らの藤原北家である。末弟だった道長は上手く立ち回って氏の長者として生き残り栄耀栄華を手

するのだが、晩年には嫡男の頼道に背かれ、何人かの娘に先立たれ、最愛の息子・顕信には突然に出家を宣告され、政治的には律令制度を崩壊に導くことになり世相が凶悪化して宮殿にまで盗賊が入り込むほどに社会の荒廃を招いた。当然、碌な死に方はしていない。藤原氏の力は急速に衰退してゆくのである。間接的にはあるがこれらの兆候は北家・藤原一族に対する菅原道真の怨霊の祟りであり、他の中小企業の怨霊を含めて日本の歴史に与えた影響は大きいのである。もしこれらのことを「嘘だ！」などと言うと、後が怖い：

当時の朝廷と貴族の退廃ぶりを現す「花山法皇の事件」が起こったのは、一条天皇の治世十一年目、北家・藤原の嫡流を継ぐ伊周は内大臣という重職にあり、弟の隆家は中納言であった。本来は冷や飯食いで終わる藤原道長は、歳の離れた姉さん（天皇生母）に気に入られ右大臣に抜擢されていた。公卿の人事は能力や人材では無く如何に天皇と繋がるかによって決まっていたのであるが、後に、そういうルールを良く理解して出世の道を切り開いたのが桓武平氏中興の祖・平忠盛（清盛の父親）である。当時の平氏（…と言っても二つの流派があり、後から平氏となった平高望流）は全くの無名で、公家に服従する武士として目が出ない日々を送りながらもコンコンと伊勢国に入り込んで領地を広げていた。何しろ伊勢神宮のお膝元であるから誰も神威を畏れ伊勢国内の土地を開墾したりしなかった。藤原道長に怒られながら、少しずつそれを敢えて実行して「伊勢平氏」を實現したのであるから、この一族を「桓武平氏」と呼べば桓武天皇に迷惑が及ぶことになる：

さて、騙されたとは言っても、花山天皇は公式

に出家して法皇を称した身であるから、本来ならば線香臭い生活をしなければならないのだが年齢が若いため只の青春時代に戻っている。歴代天皇のことを記録した著書では「…（花山法皇は）仏道修行に励み…」と書かれているが、そういう生活をしていれば起こることが無かった事件が起きたのである。紫式部が源氏物語を書き出す前の長徳二年（九九六）正月のこと、花山法皇は現役時代に自分が出家を決意するほど死なれて落胆した女性の妹（姉に良く似ていた）を見つけ出して寵愛していたから何時もの様に「妻問い」に出かけていた。藤原道長の叔父に当たる藤原為光の屋敷である。主の為光は他界しており、残された娘が家臣たちに守られて暮らしている。元々は四人娘だったが長女も相手が決まり、次女が花山天皇の許に上がり気に居られ過ぎて早死にしたから三女、四女が居て、四女は次女の生まれ変わりかと思うくらいに似ていた。それを花山法皇が知ったから実物をチェックして、後は次女同様に偏執的愛情で占有していた。これだけだと別に問題は起こらないのだが、三女のほうが内大臣・藤原伊周の複数の妻の一人になっていたのである。

一月十六日の夜、伊周と弟の隆家は藤原為光の屋敷に来た花山法皇の行列に矢を射掛けた。隆家は後に九州の海賊退治に活躍する程の弓の名手であったから「脅し」の目的で正確に花山院の着衣の袖を射通し、腕に微かな血が滲む程度の痕跡を残した。しかし家臣のほうは弓が下手で、花山院の家来が二人、射殺されてしまった。三女の許に通ってきた藤原伊周が、花山院に三女を取られたと錯覚した暴挙になる。当時は原子力発電も無く暗闇の世界なので、三も四も見分けがつかないか

らこういう馬鹿げた事件が起きたのだが、双方共に自慢になることでは無いから秘密にしていた。現職大臣の暴挙も論外だが、法皇が愛人の許に通うのも自慢にはならない。法皇側が表沙汰にできなかったから事件としては伏せられていたのだが、現代と同じで暇なマスコミが事件を嗅ぎつけたために全てが明らかになってしまった。甥の不祥事なのだが、報告を受けた藤原道長は五億円の宝籤を当てたぐらいに喜んだ。藤原北家、強いては藤原氏のナンバーワンに躍り出るチャンスが向こうから転げ込んできたからである。

被告としての内大臣・藤原伊周及び中納言・藤原隆家の罪状が専門家である大学寮の明法博士（みようほうはかせ＝東大教授）に依って勘案され、伊周は菅原道真と同じく太宰権師にされた。隆家は出雲権守（島根県副知事）に左遷されたがこのポストも刑罰専用であったから二人とも遠方に追い払われたのである。しかし藤原道長にすれば自分が北家藤原の主流になり権力の頂点に立てば良い訳で一年程でこれ呼び戻してほゞ従前の職に就け恩を売った。当然、天下は藤原道長のものになり「此の世をば我が世とぞ」と思ったのである。この事件は愚かな伊周兄弟が仕出かしたことであり怨霊組は関与していない。むしろ菅原道真に正一位太政大臣を贈ったのは兄弟の父親である藤原道隆が摂政関白の時代であるから、天神様も後輩のように太宰府に流されてきた藤原伊周を庇護してくれたことであろう。

そうかと言って「怨霊の意地」もあるから世の中が平和に過ぎるといふ訳にはいかない。その頃の記録を見れば、先に述べたように宮廷を舞台に「才媛時代」が到来して絢爛たる文化の華が開い

ただけではなく、怪しい出来事も各地に起きていたことが分かる。先ず、藤原伊周兄弟が都に呼び戻された頃に国防の拠点・九州太宰府に族が乱入して国家の威信を失墜した。さらに「はしか」が流行して来て大騒ぎになり、どういふ訳か内裏の火災が頻繁に起きている。

西暦で言うとう九九九年、一〇〇一年、一〇〇五年、一〇〇九年、そして一〇一四年からは三年連続で燃えており、これらの火災により皇位継承の象徴である「神鏡（三種の神器の一つ）」と歴代天皇の治世記録のうちの模範的な時代と言われた「延喜・天曆の分」を焼失してしまったのである。

灰になった記録というのが、菅原道真が宇多天皇に見出された頃と平将門の乱後であるから、後の世の治世に参考としたい歴史の重要部分が失われてしまったことになる。これは怨霊の皆さん方も予期しなかったことで、認知症が入ってきた藤原一族を中心とした当時の宮中勤務者の重大な怠慢のようであり、怨霊の所為には出来ない。

そしてこちらは怠慢や怨念ではなく、人間の積極的な野心に起因する出来事が、最初に内裏が燃えた西暦九九九年（長保元年）に発生している。何と、天皇家が崇拝する伊勢神宮の所在地・伊勢国内で本格的な合戦をした武士がいたのである。その人物と言うのが平将門を追討した平貞盛の後継者である維衡（これひら）と、平国香の末弟・良茂の孫に当たる致頼（むねより）であり、どちらも桓武平氏の一族である。この両者は、どうい

う手蔓からか不明ではあるが先に述べたように早い中から伊勢国に目を付け盛んに土地の開拓を行う一方で武力を蓄え、その勢力を誇示していた。伊勢は神領であるから勝手な開発を誰も控えて

いるのだが維衡・致頼両名は、それを良いことに政府の目を盗んで入り込んでいたのである。その両者が衝突をした。維衡と致頼の争いについては「今昔物語集」に「合戦して咎（とが）を蒙りし語（ものがたり）」として記録されており「武士の道を挑んだ戦い」のように書かれているのだが、それは嘘であり「その領、各一国にありて」と書かれてあることから、領地奪い合いの合戦であると認識されている。名門と言われている武士が嘘をついてはいけない。

この合戦は欲望と歪んだ意地を賭けた対決であるから双方にかなりの死傷者が出た。両者は左右の衛門府に引きたてられ厳しい審問を受けて判決では平維衡が淡路島へ、そして平致頼は隠岐の島へ流された。この両名は「日本外史」によれば、当時は源頼信（八幡太郎義家の祖父）、藤原保昌（歌人・和泉式部の夫、盗賊の袴垂保輔を怖れさせた公家）と共に「四天王」と称されていた。当時は未だ武士の存在が非公式のもので藤原政権の管理下に置かれているような状況であったから、四天王でも五大王でも勝手に戦闘をすると処罰されたのである。既に其の時代には「桓武平氏」などという肩書は何の意味も無くなっていた。武力が物を言う時代が到来しつつあり同時に怨霊の活躍も限界を迎え、寂しくはなるが諸国の怨霊屋が相次いで閉店したと思われる。

藤原道長の絶頂期と言われる後一条天皇（道長の孫）の時代に刀伊（とい＝朝鮮の北方民族・女真）の賊が五十隻程の船団で壱岐、対馬を襲い、更に九州に押し寄せてきた。これは嘘ではない。異民族であるから日本の怨霊とは全く関係が無く日本に対する夷敵の襲来である。此の時に太宰府

の副長官として指揮を執ったのが、二十年前に花山法皇を脅かした罪で出雲に飛ばされていた藤原隆家であり、武士でもないのに自ら陣頭に立って戦い賊を撃退している。天神様も、地元九州で日本国の危難を救ったのが藤原一族のほみ出し者であることを知り、ようやく「お怒り」を解かれたのであろう。この事件は、防衛に失敗すれば後世の「神風」に助けられた「文永・弘安の役」になりかねなかった大事なものであるが、都の公家たちは全く危機感を持たず、藤原隆家には何の恩賞も無かったらしい。其の所為だけでも無いと思うが危険な仕事は「武力で奉仕」する者たちに任せられ、公家社会では出世に見込みの無かった下請け業の源氏・平家時代が到来するのである。

「…望月の欠けたることもなし…」などと歌に詠んだ藤原道長も、悪業の報いで苦しみの果てに死ぬことになるのだが、その頃は都の治安も地に落ちていて、事もあろうに内裏に盗賊が入り込み女官が衣装を剥がされる事件なども起きている。そして道長の死の翌年に勃発したのが既に第三章でも触れているが「平忠常の反乱」なのである。長元元年（一〇二八）六月、平国香の弟で将門の乱には中立を保っていた平良文の孫であり母親が将門の娘とされる平忠常が、中央政府に対して反抗の態度を明らかにした。

平忠常は前上総介（さきのかずさのすけ）とされている。上総国は常陸国と同じく「親王」が名前の「国司」になる国であるから「介」は事実上の「国司」である。そういう人物が単純に反乱を起こすのは「前太平記」に書かれたような女性問題の拗（こじ）れや狩りの獲物を巡る対立というのは嘘であり、中央政府の無策に加えて、各地に

土着し成長して来た地方武士団の力が平維衡と平致頼のように、強いては平将門のように強力になった―藤原一族の陰で保身に汲々（ききゅうききゅう）としていた武士から力を誇示できる武士に転換するチャンスが到来したことになる。

「藤原政権が何だ！」平忠常は祖父・将門の無念を思いながら、或いは将門の怨念に取り憑かれたかも知れないが、堂々と時の権力に挑戦したのであろう。急報に接した政府は、檢非違使尉（けびいしのじょう）検察庁の判官職）の平直方に僅か二百の随兵を与えて、然も儀式を重視して四十日も遅れてから討伐に向かわせた。事態の重大さに気付いていないのであり、地方の事はお座成りの対応しかできなかったのが政府の実態である。

平直方は、貞盛の子・維将の孫だと思われるが実父の維時が貞盛の養子になっているらしいので平貞盛の孫に当たる。貞盛の直系は清盛に至る武士の家として藤原一族に抑え付けられていたけれども直方は勉強してエリートコースの公務員になっていた。学業成績は良かったかも知れないが、合戦の経験者ではないから、そういう人物がこれだけの数方と言われた大軍勢に向かって立太刀打ちが出来ない。どうすることも出来ずに交代させられた。替わって登場するのが清和源氏の源頼信（八幡太郎義家の祖父）であり、此の人が前に事実上の国司として常陸国府（石岡）に勤務していた時に平忠常が服従していた関係で「頼信が来た」だけで「あつと言の間」に騒動は解決したのである。

この出来事により軍事的な紛争解決の専門店として「清和源氏」が知れ渡るようになり、二十数年後には「前九年の役」「後三年の役」により源氏

株式の高騰操作が行われることになる。一方の平氏は、着々と伊勢国において力を蓄えてはいたが未だ歴史には登場しない。しかし白河天皇が皇位を堀河天皇に譲り、應徳三年（一〇八六）に院政を開始したことによって武士の需要が増えようやく平氏が世に出る機会が到来した。

頼山陽が「日本外史」の冒頭で述べているように大和朝廷は天皇が国民のトップに在って有事の際には国民を動員して事に当った。軍事権を臣下に委ねることは無かったのである。ところが藤原一族が朝廷に繁殖するようになり、中国（唐）の制度を真似て「文」と「武」の役職を分離し専門化したために、中央に於いては「天皇の身辺を護る」ことが軍の任務になり、地方では諸国の軍団が警備に当たるようになった。国家としての防衛力は失われてしまったのである。平忠常の場合のように地方で反乱などが起こった場合には、そのつど將軍を任命し、それに僅かな人員を付けて派遣していた。後は出先の国々で国府に置かれた軍勢を使うか、諸国の豪族たちに天皇の命令を伝えて政府軍に加えたのだが、反乱が鎮圧できれば経費がかかるから、その場で契約を解除していた。そうした中で「何時でもご要望にお答え出来る」武力として清和源氏が売り出してきた。

一般には芸能界や運動会、或いは歌合戦で紅組・白組が対決する程度で平氏と源氏が比較されるように思えてならないのだが、平清盛や源頼朝の意見を聞くまでもなく、両氏は共に皇族から出て武門の家と称される。しかしながら本質的には大きな違いがあるので触れておくと、先ず「源氏」は天皇から出て臣下になった家系であり二十の流があると考えられている。第五十二代の嵯峨天皇が十

七人の息子たちに一字の名前を付して「嵯峨源氏」としたのが最初であり、平将門事件を惹き起こした前常陸大掾・源護は、十七人のうちの誰かの子か孫だと推定されている。(続く)

## 【風の談話室】

季節の巡りが早いのか遅いのか判断の付きかねる毎日です。

4月にはもう桜の花が散っている春回で、この地では聞いた事がない。桜が散って、早々と真夏が来るのかと身構えた途端、寒波の襲来で冬に逆戻りである。

平均年齢の毎年向上(知的老化)している風の会の面々にとっては、季節についていくのが大変である。

だが、この会報も今回で満7年となる。良く頑張っているなと自画自賛である。

## 【ことば座だより】

偉大なる大先輩ママコさん

小林幸枝

4月7日、ギター文化館での「里山と風の声コンサート」に、パントマイムのヨネヤマ・ママコさんがクラリネット奏者の橋爪恵一さんに友情出演してくださいました。橋爪さんはママコさんの舞台上何度も演奏しており、それで友情出演となったのだそうです。

ママコさんは、日本のパントマイマーの先駆者で、世界的な表現者として高い評価を受けておられ、私にとっては雲の上の大先輩となります。

大変失礼な事なのですが、ママコさんの事は、今年十月に行う東京公演に出演いただけることを白井先生から聞かされて初めて知ったのでした。両親に訊いた所、団塊の世代から上の人には良く知られており、世界的なパントマイマーだとのことでした。

ママコさんのマイム表現を目の前に見せて頂いた時、その圧倒的な表現スケールに驚かされました。舞台での表現のスケールに関する話は白井先生から話を聞いていましたが、ママコさんのマイムを見て、これがスケール感というものなのかと納得させられました。

世界的な表現者であるママコさんと、十月には東京で同じ舞台に立てるのだと思った瞬間、これは大変なことになったと思いました。今迄は、井の中の蛙で怖いもの知らずに手話舞をしていましたが、東京での公演では通用しないと言うことを知らされました。

今年に入ってから、柏木久美子さんのスタジオで、ダンスの基本トレーニングを指導して頂いておりますが、これからはもっと気を引き締めて、基本を身に着けながら自分の表現創りをやらなければいけません。

6月の定期公演は、東京での十月公演を念頭において、朗読手話舞の見直しを兼ねた「振り返ればそこに恋歌が…」を演じます。一皮も二皮も向けた自分が表現できればと思っております。

6月公演では、柏木さんとの共演はありませんが、柏木さんは伊藤道郎第三段の舞と、市川紀行

さんの詩を、白井先生の朗読と山本光さんのピアノで舞います。

大勢の皆様にご覧いただければ願っております。どうぞよろしくお願いたします。

## 菅原茂美の

### 「コーヒープレイク

#### ベルクマンの法則

ベルクマンが1847年に発表。「恒温動物においては、同じ種でも、寒冷地に生息するものは体重が大きく、近縁な種間では、大型の種ほど寒冷地に生息する」。具体例は、クマでは、熱帯のマレークマは体長140cm、温帯のツキノフクマは200cm、寒帯のヒクマは150cm、300cm、ホッキョククマは2000cm、3000cmである。この現象の理由は、体温保持は筋肉運動や代謝で熱を産生し、汗の気化熱で熱を放散する。熱生産は体重に比例(体長の3乗)、熱放散は体表面積に比例(体長の2乗)する。これを「2乗・3乗の法則」とも言う。

似たようなことは「アレンの法則」(1877年発表)にも見られる。「恒温動物において、寒冷地に生息するほど耳・吻・足・尾などの突出部が短くなる」。キツネの類の耳では、アフリカのフェネックは体に似合わないほど大きな耳を持ち、ホッキョクギツネは非常に小さい。アジア人の鼻が低いのは、シベリアの奥地まで進出したモンゴロイドの露出した鼻が凍傷にかかるため、自然と「平顔」に進化したといわれる。短足も同じこと。

ところが変温動物では「逆ベルクマンの法則」が見られる。ヘビやトカゲ等は低緯度ほど大きくなり、「コオロギは高緯度地帯ほど体が小さくなる」。



今月号の風の談話室は投稿がなく、ちょっとさみしくなったが、それは仕方ないことである。当会報「ふるさと風」もき回でちょうどまる一年、84号になった。継続は力なり、ということが言われる。しかし、唯継続していてもそれが力になると言うことはない。継続が力になるのは、マンネリから脱して常に現状を破壊して新しい創造を生み出している時にだけいえる言葉である。継続することは、行動に対して常に入り込んでくる固定観や既成観を常に打ち据え、潰して行って新しい変化を生み出して行く事を言うのである。マンネリの惰性で継続しても力は生まれない。また、これで良いのだとそこに安住してしまった継続にも力は生まれない。継続が力になると言うのは、常に意識して現状を変えていくと言うことに他ならず、変化を生み出す継続でない限りそこに力は生まれてこないと言える。風の会は、常に自由で自在でありたいと願っている。自由で自在であると言うことは、他人への迷惑を考えないことである。他人への迷惑を思うようになる、思考がおもねりになってしまう。私が思う事を私が言うのに、何の遠慮やおもねりが必要だと言うのか。人は、自由に自在に自分を語れなくなったら、唯の下衆になってしまう。人は高貴に自分を語らなければ、人であることを放棄することになってしまう。

風の会は、常に過酷に屹立して居たいものだ。

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で  
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさと風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465  
Tel 0299-55-4411

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「ことば座」第25回定期公演

「常世の国の恋物語」第3 2話

## 「振り返ればそこに恋歌が」

2013年6月15日、16日(14時30分開場、15時分開演)

ことば座第25回定期公演は、これまでお届けしてきた常世の国の恋物語1話～31話までの中から小林幸枝のベストセクション3の手話舞を「振り向けばそこに恋歌が」と題してお届けします。

また「ふるさと風の会」7周年記念応援舞台として石岡に伝わる伝説を基に朗読舞劇として書き下ろした「新説鈴ヶ池物語」を朗読中心のバージョンに改作したものをお届けします。

第23回定期公演より、モダンダンスの柏木久美子が山本光のピアノ伴奏で伊藤道郎ナンバーを演じて貰っていますが今回は、シューマンのシンフォニック・エチュードより「怖れ」スクリアピンのプレリユードより「希望」を舞います。

また、朗読舞として市川紀行作の「春の陸平に立ちて歌う」を朗読：白井啓治、舞：柏木久美子、ピアノ伴奏：山本光でお届けします。

※入場券 3,000円(小中学生1,800円)

ギター文化館 0299-46-2457にて発売。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

Tel 0299-24-2063 fax 0299-23-0150

# ふるさと風の会7周年記念展

「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を掲げ、自分達の思いや考えを確りと表現していこうと立ち上げた「ふるさと風の会」も5月末で7周年となり、毎月発行しております会報も通巻84号となります。振り向けば来し方の何と短くある、とは言われますが、どうしてどうして実に大変で長い時間と距離でした。とても春の世の夢の如しとはいきません。

毎年、6月には兄妹グループである「劇団ことば座」の発信基地であるギター文化館での定期公演に合わせて、ふるさと風の会の「歩み展」を開いてきましたが、今年も6月15日（土）、16日（日）（10時～14:30）で風の会歩み展を行います。

今回は7周年を記念して、ふるさと風の会発起人である打田昇三、兼平ちえこ、白井啓治の三人による「7周年を振り返って」と題してのふるさとトーク会を16日（日）13時～14時20分で行います。

一緒にふる里について考えてみませんか。

また、絵手紙から出発し、風のことは絵という新しいジャンルを確立した兼平ちえこを中心とした「ことは絵同好会」の皆さんの展示発表会も同時開催いたします。

自分たちの暮らすふる里をギター文化館で改めて見つめなおしてみませんか。  
ふるさと風の会展（10:00～14:30）入場無料。ギター文化館 Tel 0299-46-2457  
皆様のおこしをお待ちいたしております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>